

大井実の BOOKな話

福岡市内で書店『ブックス
キューブリック』をいとなむ
大井実さんの、本のある日
常をつれづれに。

撮影／川上信也

昨年話題になった、日本を代表する作家と アーティスト、そのいくつかの共通点。



ノーベル文学賞の有力候補として昨年話題になった村上春樹。彼の著作の中でもっとも印象に残っているのがデビュー2作目の『1973年のピンボール』です。私が大学の浪人時代に買った最初の村上作品で、その内容も表現も当時はかなり衝撃的でした。

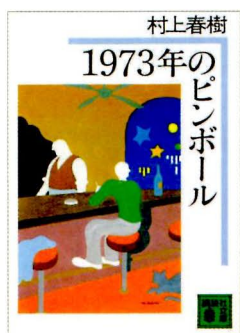
この初版本を手にした80年代の始まりは、それまでの日本の、いわゆるグロークソング^{グロウソング}的思考から、音楽もスタイルも一気にデジタル化した新しい時代の幕開けの頃。お洒落で斬新で摩訶不思議な村上ワールドは、まるでシュールな映画でも観ているようで、抽象的かつクールな独特の世界観がとにかくくっこよくて、ぐいぐい引きこまれたのを覚えています。

物語の舞台になった1973年といえば、学生運動が盛んで若者が熱狂にわいた時代の終焉を象徴する、浅間山荘事件が起きた翌年。この作品には当時の若者が心を持っていた虚無感や喪

失感が色濃く表現されています。そして、ほとんどデビュー作に近い作品ではあるものの、村上春樹という偉大な作家のその後の方向性、今日の彼の作品へとつながる要素が随所にちりばめられていると思うんです。

同じように、日本の音楽界で、昨年デビュー40周年を迎えてあらためて注目されたのが松任谷（荒井）由実。同じ1973年に出た彼女のデビューアルバム『ひこうき雲』は、今でも色あせることのない、チャームिंगなユーミンワールドが展開されています。そして、このファーストアルバムでユーミンの音楽性はすでにほぼ完成されているといっても過言ではないでしょう。村上春樹と同じで、アーティストとしての方向性が最初からでき上がっている。天才の天才たる所以ですね。ラブソングといえどもどこか影のあるドラマティックな表現も、先の村上作品と共通する部分が多いのではないのでしょうか。

『1973年のピンボール』
村上春樹／講談社文庫／
420円（税込）



『ひこうき雲』荒井由実

